記　入　日　2018 年　1 月　15 日

１．概　要

実践団体名	見てみようよ！常総市の会		
連絡先	担当　（佐藤）０９０―７７５４―１９０９		
プランタイトル	水害の記憶を未来につなげる『ステッカーツアー』運営		
プランの対象者※1	６，１０，１１	**対象とする災害種別**※2	３

※1　別紙「記入上の留意点」の1．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※2　別紙「記入上の留意点」の2．項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント！】

水害の記憶の風化を防ぎ“想定外”の発生可能性を常に共有していける“防災減災に鈍感にならない地域”づくりを推進する。「水害を記録にとどめない（痕跡を消し去る）復興」ではなく、「水害の記憶とともに生きていく復興」の実現のために、防災減災意識を高める目的で、平成27年9月水害の洪水水位のステッカーを街中の許可を得た場所に貼り歩く『ステッカーツアー』を運営する。

【プランの概要】

2015年9月豪雨による水害被害の記憶を風化させない被災地域の取組として、①水害体験の掘り起し　②語り部の発掘・育成　③街の各所における洪水高の記録表示（洪水水位高ステッカー表示）　を一体のプロセスとした「ステッカーツアーコース造成」を行う。これは市内外在住の一般や学生による「ステッカーツアーコース造成チーム」が、市内洪水被災地域を取材し、当時の記憶を語っていただける“語り部”を掘り起こすとともに、当該地域の洪水時水位を聞き出し、それをマップ化、その後、多くのツアー参加者を集めたウォークツアー（語り部のもとを訪れ各ポイントに参加者で水位ステッカーを貼って歩く『ステッカーツアー』）を実施運営するものである。

【期待される効果・ここがおすすめ！】

鬼怒川と小貝川に挟まれた常総市は古より水害常襲地帯であり、古い農家では納屋に船を吊ってあるなど、“備え”をしていた。このステッカーツアー準備段階では、コース造成メンバーチームが参加する形で、研究者の話を聴く「勉強会」も実施し、“水とともに生きてきた”地域の歴史を学ぶ。そのうえで、それらの知恵や教訓を伝えていくきっかけとして、まずは昨年9月の豪雨災害の記憶風化を防ぐ『ステッカーツアー』をスタディツアーとして確立する。これは、今後の、“市民防災力”向上のきっかけになるものである。

２．プランの年間活動記録（2017 年度）

	プランの立案と調整	準備活動	実践活動
4 月	平成 29 年度第１回ステッカーツアー実地地区決定会議		
5 月		根新田地区下見	
6 月		根新田地区語り部調査	横浜市篠原地区社会福祉協議会視察ツアー（49 名）受入
7 月			第１回ステッカーツアー実施（根新田地区）参加 20 名
8 月	視察受入検討会議	視察受入調整	
9 月		視察受入調整	全水道東京労働組合視察ツアー（60 名）受入 港区社会福祉協議会視察（43 名）ツアー受入
10 月		視察受入調整	横浜市高田地区社会福祉協議会視察ツアー（36 名）受入
11 月		視察受入調整	横浜市新吉田地区社会福祉協議会視察ツアー（40 名）受入 横浜市日吉地区社会福祉協議会視察ツアー（40 名）受入 栃木市･もてぎの川をきれいにする会視察ツアー受入
12 月	平成 29 年度第２回ステッカーツアー実地地区決定会議	橋本町下見	
1 月		橋本町語り部調整	
2 月			第２回ステッカーツアー実施（橋本地区）11 日
3 月			

３．実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号：　１　】※3

タイトル	第１回ステッカーツアー実施（根新田地区）
実施月日（曜日）	7 月 1 日（土）
実施場所	根新田地区
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：　石川理司 所属・役職等：　当会代表
所要時間または「コマ数×単位時間」	約 5 時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	１７　　スタディツアー（ウォークツアー）
活動目的※5	３
達成目標	探訪地区の被害状況を共有しこれを記録する推移ステッカーを貼る
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	実施地区決定→区長挨拶→語り部調査→コース下見・実査→広報物作成→当日運営→ふりかえり
準備、使用したもの **・人材** **・道具、材料等**	・コーディネーター（外部起用：当初からの伴走者）
参加人数	20 名
経費の総額･内訳概要	計 7 万＝ステッカー費 4 万　広報物作成費（ステッカーツアーチラシ）2 万、東京中間発表およびコーディネーター交通費　1 万
成果と課題	【成果】 根新田地区の水害状況を参加者で共有でき、またステッカーを貼ることで被災の事実を改めて住民の方々と共有し災害の無い地域への意識を高めることができた。 【課題】地元高校生の参加がいなかった。
成果物	広報チラシ、報告（発表用）スライド

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4．項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：　２　】※3

タイトル	視察ツアー受入
実施月日（曜日）	6 月 25 日、9 月 16 日、10 月 16 日、11 月 7・20・29 日
実施場所	常総市森下町・橋本町
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：染谷みどり 所属・役職等：当会会員
所要時間または「コマ数×単位時間」	各回約 5 時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	１７　　スタディツアー（ウォークツアー）
活動目的※5	５
達成目標	外来者視察を地元で受け入れることで水害の事実を広く共有する
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	実施地区調整→区長挨拶→語り部調査→コース下見・実査→→当日運営→ふりかえり
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	水害被災時記録資料連携の茨城 NPO センターコモンズで用意）
参加人数	各回 30～50 名
経費の総額・内訳概要	未計上
成果と課題	【成果】 多くの来訪者に常総水害の実態を伝えられ、また受け入れた地元チームも新たな学びとなった。 【課題】 有償案相体制が時間的につくれず、ボランティアワークとなり、地元に負担感が高まったこと。
成果物	報告（発表用）スライド

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：　３　】※3

タイトル	第２回ステッカーツアー実施（橋本町地区）
実施月日（曜日）	2918 年 2 月 11 日（日）＝※報告書提出時点で未実施＝
実施場所	常総市橋本町地区
担当者または講師	担当者・講師等の区分：担当者 氏　　名：古谷修一 所属・役職等：当会会員
所要時間または「コマ数×単位時間」	約 5 時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	１７　　スタディツアー（ウォークツアー）
活動目的※5	３
達成目標	探訪地区の被害状況を共有しこれを記録する推移ステッカーを貼る
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	実施地区決定→区長挨拶→語り部調査→コース下見・実査→広報物作成→当日運営→ふりかえり
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・コーディネーター（外部起用：当初からの伴走者）
参加人数	
経費の総額･内訳概要	計 7 万予定＝ステッカー費４万　広報物作成費（ステッカーツアーチラシ）２万、東京最終発表およびコーディネーター交通費　１万
成果と課題	【成果】 【課題】
成果物	

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

４．苦労した点・工夫した点

プランの立案と調整で苦労した点工夫した点	地元との調整 　地区によっては、水害という地域イメージのマイナス要素をあえて振り返るスタディツアー実施に難色を示す住民の方もおられ（ことに決壊地点等）、こうした方への事前説明や交渉に苦労した。当会の方針として決して無理強い・強行はせず、丁寧に話で合う中で、どうしても先方の態度が軟化しない場合は、予定コース変更等で、先方に御迷惑にならないよう対応するなど、回避措置をとった。
準備活動で苦労した点工夫した点	視察受入れに関し地元案内チームづくり 　視察が多く来訪されること自体は地元の意識も高められることから悪いことでないが、有償受入体制が構築できず結果としてボランティアワークベースとなってしまった。結果的に地元協力者に負担が寄ってしまい、今後の課題となった。
実践に当たって苦労した点工夫した点	ステッカーツアーでの集客 　チラシを多く刷り関東鉄道常総線駅にポスターを張るなど、またリビング紙に情報を掲載していただくなど、不十分な体制ながら手を尽くし広報したものの、実際の参加者は 20 名程度であり、なかなか厳しい状況であった。参加費を抑え、ほぼ実費の一名 2000 円としたが、この額でも地元からの有償参加者は非常に限られた結果となった。

５．他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・同窓会組織	立正大学 筑波大学	地域研究のへの協力（語り部マッピング） アドバイス
保護者・ＰＴＡの組織		
地域組織	根新田地区町内会（区長） 常総市水害被害者の会	実施運営協力
国・地方公共団体・公共施設		
企業・産業関連の組合等		
ボランティア団体・ＮＰＯ法人・ＮＧＯ等	茨城 NPO センター・コモンズ	運営協力 全般サポート
職業、職能団体・学術組織、学会等	防災科学技術研究所	アドバイス

６．成果と課題（実践したプラン全般について）

成果として得たこと	当報告書記載時点で募集型のステッカーツアーは年度内２回のうち１回しか終了していないが（第二回は２月 11 日予定）、丁寧に準備を進めるこの実施スタイルはある程度タイ着してきた感がある。まだまだ、洪水水位を街に貼る抵抗感がある住民の方もおられるようだが、地元の理解も得やすくなってきた。 いっぽう視察はその受入協力に尽力したこともあり、来訪団体のつながりの中で、大変多くの方に当地に来訪いただいた。
全体の反省・感想・課題	ステッカーツアーの準備振興に時間がかかり、第二回の開催がずれこんでしまった。視察については、数多く来訪されること自体は地元の意識も高められることから悪いことでないが、有償受入体制が構築できず結果としてボランティアワークベースとなってしまった。結果的に地元協力者に負担が寄ってしまい、今後の課題となった。 また、全体として地元高校生等次世代の参加が少なく、継続に難しさを感じることとなった。この点を次年度取組の課題としたい。
今後の継続予定	平成 30 年度は地元高校生等次世代の参加巻き込みを図るべく、学校との連携を含め戦略的に影響力を拡大していきたい。地域学習を中心に据えた計毒的取組で、最終的な目標である「常総水害メモリアル廻廊」を構築すべくガイドの育成を進めたい。

７．自由記述欄　※6

※6　自由記述欄は、防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等を盛り込んでください。また、前頁までの記述に不足した事項、参考資料、写真等を自由にご記入ください。なお、3ページ以内厳守でお願いします。

【防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等】

１.地形・歴史を地域で学ぶ事の重要性

「水害の記憶を伝える」ということは２年前の水害の浸水状況を水位ステッカーで再共有することだけではなく、過去からしばしば繰り返されてきた当該地域の洪水・氾濫の歴史を知ることでもある。

当会が 2017 年 3 月（※チャレンジプラン期間外）に常総市生涯学習課に属する生涯学習センター歴史研究員に、地域の歴史を学ぶ会の講師をお願いしオープン参加型のセミナーを開催したが、そこで話されたことは、過去海（湾内）だった常総市の地形や、（今回の洪水で堤防決壊した）鬼怒川と小貝川に挟まれた水害常襲地帯であるという歴史事実であった。市内旧家にはまだ、“揚げ船”（洪水時の避難手段としての木造船を納屋につるしておく）が残る家もあり、こうした「地域の記憶」を近視眼的な捉え方でなく、長い時間スパンで視野に入れ、啓蒙を図っていくことが重要であるとの認識を共有し、本年度のステッカーツアーにおいても、ガイド中んい、これら歴史事実を伝えるべく努力してきたところである（ちなみに本年 2 月 11 日に開催予定の橋本町地区ツアーコース内には明治 43 年の洪水石碑があり、これもガイドポイントとする予定である）。

２.語り部発掘の可能性（話したい人は必ずいる）

ツアー実施前は語り部を探すことの難しさについて懸念していたものの、語り部はステッカーツアー実施当該区長ご自身や、その紹介で、見つけることができた。被災体験は同様の被災体験を持つ同地域の人とは日常的にはかえって語りづらく、被災時の“思い”をため込んでいる人も多いことに気付かされた。こうした方々は、誰かにそうした思いを伝えたい、話したいと潜在的に思っている人も多く、いざ話し始めるととめどなく語り出す方もいた。2017 年度は立正大学の研究室が水害語り部の調査とマップ化を当会協力で進めてきており、こうした語り部の記録・アーカイブ化が、我々が最終的に目指す「常総水害メモリアル廻廊」の構築のため

に不可欠であるとの認識を新たにしたところである。

〈参考：7 月 1 日実施　根新田地区ステッカーツアーのコース検討図＝語り部ポイント＝〉

３．「水害の記憶だけ」を伝えるのではなく、地域の“光”も併せて伝える必要性

防災学習の催し、ことに被災体験伝承は、大変な思いの追体験に重点が置かれることが多く、ともすれば重い内容一辺倒になりがちである。当会のステッカーツアーでは、当初から対象地区の“光”（観光ポイント、美味しい食事処、ご当地お土産が買える店）をコースに挟むことで、当該地域の良さもアピールしてきた。住民の方々の中には「もう水害話はいいよ」という倦怠感があるのは確かであり、今後は当市

2017年7月石下地区テストツアーの模様

で 2019 年に一部競技が開催される茨城国体を市民出盛り上げていく観光振興的な視点も併せ持って、水害の記憶をスムーズに継続的に残していけるよう、さらに運営形態を磨いていくつもりである。

（自由記述：１／３）

（自由記述：２／３）

（自由記述：３／３）